

和訓栞

比之部

廿五

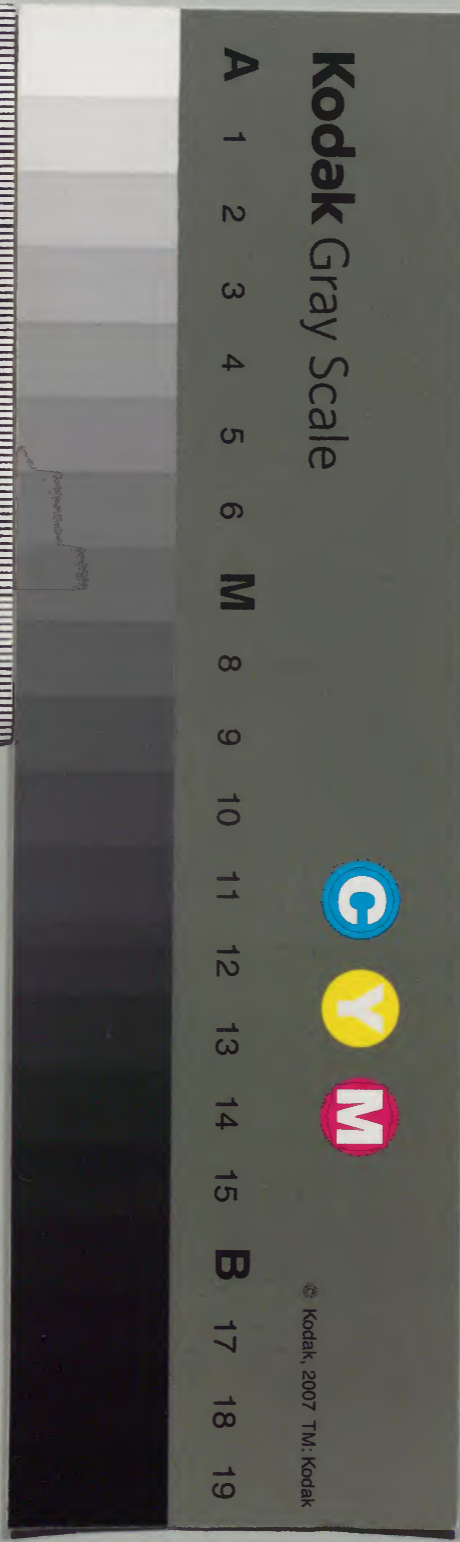
番外書冊

				和書門
			一八四三九	類
			二七	函
			二四九	架
			二四	冊

庫	文	閣	内	
				和書
			一八四三九	類
			二四	冊
			二四九	架
			二四	冊

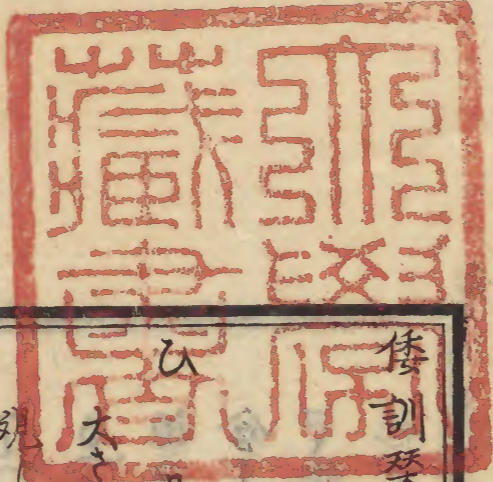
内閣文庫	
番號	和18439
冊數	24 (22)
函號	263 20

字學韻冊



糊などで貼り付けられている部分がめくれない箇所あり

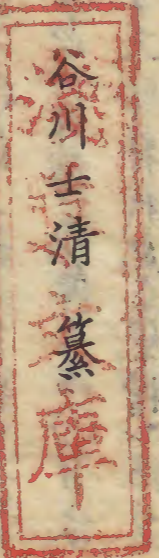




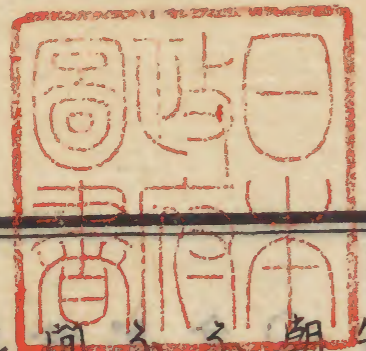
倭訓栞前編二十五

比の部

洞津



日とらへ明くまはしきと自然よかくらひ初めし語たり日出の  
 大富士山の如く寅時より深紅あるは土佐南海北眺望志別鳥羽の漂船の  
 所も同一大くく又申るは地水の陰氣と含める故なり出る時ハ遠  
 地より十七萬里日中ハ近し地より十五萬六千五百里なりとらるる○清和  
 實録二月初出白无光月初出赤如丹とらるる又えら慶長十九年春  
 朝日如銅く神君の年譜よええ寛文二年三月數日の間月色の如く光  
 るる一正徳四年三月十七日より十九日まで朝暮日色血の如く光  
 るる一月も亦銅鏡の如く赤く光るる○靈と神代紀よあり天地の  
 間日ほく靈なるかきとらるる○天と日ともらるるハ天皇とらめ  
 るる○日け御子ともらるる御門成天つともらるる日御門  
 ともらるる後世天の下ともらるる言成日の下ともらるる類也又天ともらるる日と



倭訓栞 卷之二十五



火の語は火と別するもゆりも○火も日より出たる詞なり火の精霊ハ  
 日なりよて神代紀に日と心の象と云天地の心ハ日なり人乃心霊ハ日の  
 餘光なり古語に靈ハ火也とも見えたり日本紀に燧もよあり○肥前  
 肥後も火の國あり日本紀に見えたり○琉球に燧すつとあり○  
 貧家の譬に火ありとあり詩に飢火也○又火井あり越後に出た  
 ○檜とひもひのさとも火と出さ木なりといつ本草に据ハ檜  
 いらふと成ハ一ともいつ癸辛雜識に新羅松一名羅木あるとの  
 といハ一と羅木ハ日向松あり又唐のさあり山ひのさあり葉こも  
 ○氷とよむハ冷汁あり一カ葉集に氷とよむハ一カ葉集に氷とよむハ  
 源氏にゆきハ色のこほりこほぬと見えたりともひの色といふと  
 會くハ一説に氷字の唐音ともいつ○倭名抄に目翳と訓せ  
 る氷より出る語を今もいふとみふとあり外障内障なり○日本  
 紀に槓とひともいふとみふとあり水と引のさあり一神代紀に槓とあり

樋字ハ古事記に足字書ハ木名と云る下樋懸樋受樋石樋瓦樋な  
 と歌よりあり○刀の血漕とひとふも樋の義ハかよる全濟兵制に備前  
 以有血漕為巧刀上或鑿龍或鑿劍或八幡大菩薩春日大明神天照皇太孫  
 宮皆形着在外為美觀者と云今かゝる者と貴とせん○日本紀に後とみ  
 といふ李白の詩に機中織錦秦川女云々停梭悵然憶遠人と云申和名鈿  
 といふ村とよむ新撰字鏡に村とひといふといふ響なり○物のかゝ  
 さる水ひしは信濃に田井あり比田井あり上野に川祢川あり比祢川  
 あり如○面と和して心の和せきとひとすとすといふ諺ありこハ  
 村と箴と云れはふと一ツ所よと云ぬハ譬へたり○神代紀に穀と  
 よむハ其すといふ也○後宮名目ハ經水と火と名けり○對  
 屋に出く別火とかまふと云る起りハ別火とかまぬと云る  
 ありといふなりといふ○傍とよむハ略畝傍山といふ  
 ○飯とよむハ略詩飯飯高の類是なり○乾干とよむハ略  
 略なり個も同一○引ハいふと略なり



△ひあー 晴蛉日記源氏物語の日のほりと見えたり揚用脩の書に謬  
語より脚射空金樓直とあり

ひあひ 俗語也日間の香之踏危乃意よりひ氷間乃香より履薄氷乃  
意あり○香具之火のひとあり火味乃香

△ひらつ 香とより日出の香の一説は香とほもより穂出乃香と  
らつ靈異記よりひらでうるとあり

ひらけ 氷池乃香之氷室は同一とあり○氷池祭とらふ氷乃あや  
年の凶年なふとて祈り多し延喜式よりええらつ○生火とよあり  
官人あり

△ひうが 日本紀より日向とより和名抄よりひむがもええらつ朝日直刺  
夕日日照國なふより紀よりええらつ九々神代は皆日向の國は都志

半ぬり景行天皇も行宮の高屋宮とらふ○神代紀より筑紫日向小戸橘  
之檍原とええらつ日向乃名初て出よりとらふ此事蹟筑前よりありと日

向ありさふり松下氏貝原氏かの説よりくええらつ日向と九國乃

惣名なりとらつ今文意成詳より考を大日向乃小戸の橘之檍原より對  
より日向と橘も所謂枕詞也日向より日向の所とらふ也一國乃名より

とよりひむとよりひむ風神祭祝詞より吾宮者朝日乃日向處とらふ  
万葉集より八十二隣之宮亦日向とええらつ垂仁紀より將軍へ綱田と美

称より倭日向武日向とらつよりええらつ此考へ通證は漏れぬとて  
るよ記よりぬ○大同類聚方より日向藥高千穂藥ともらふ大伴宿禰家守

傳之葵考とええらつ○ひうがひらつひの丈菊なり江戸よりひまらつ大和  
加賀よりひくはつとらふ

ひうら 日本紀倭名抄より燧とらふ火成擊出とらふ具なり靈異記より燧  
とひらつびと訓す新撰字鏡より磨とひうら石とより今諸國より産す

本字より玉火石なふへ伊勢度會郡乃村名より火打石あり○旅立人  
より火打と贈す多敷集より多くええらつ日本武尊乃故事より起まり古

事景行記より○燧乃推現より清瀧乃神祠とらふ○兼好法師  
伊賀國種生在國見山は菴と結ひ比津辨筑紫へまらつとらふ火

委川 采 卷之二十五



うち滅贈る

うららぬるふり道のりなりたるふ思ひたへるや

此火打石菴乃山あり奇石也俗に膏薬石と云ふ○東鑑に奥州比内郡に事初名抄に又火打石城に越前燧山あり北陸第一の要害木曾義仲乃築く取らる○火打金と火録又火刀と云えり○燧杆古事記に見ゆる火打なり○熱田より火打なり

ひうらぬる古事記日本武尊乃るり出たり今猶宝劔は此物とつけりかやとれ腰刀の燧袋と云ふは是なり宋朝乃削り武官五品以上の佩刀火石袋なりと帯さるり郭思益論に云えたり新千載集に親盛の物乃使より往に金乃火打らほくと云沈と云ふはの指乃袋と云え舞楽盆圖採采老乃舞乃出立よもさひは火打袋とゆひけり太平記にも較りける白太刀は虎皮乃火打袋とさげと云えり四十日後よけりはふり大双紙より布なり○延暦式は火打錦の袋を用る錦なり一○太平記に青砥左衛門夜よ入り出仕志り候といつも燧袋なり

へく持てぬ錢と寸文とるるぐりて滑川へ落りたると云えり是と今の巾着に此遺制なりと知へ

ひえ 新撰字鏡に稗と云り微寒乃物なり性乃冷は云なり一或に振荘の云ふり又ひ風に何なりと云はる易を云ふなり又ひえまのり狗尾神なり新六帖に

穂よもる夏田よりするひえ草はひと接らるる世や過らん一説にひえの穂子よりひえの稗なりと云る○稗嶋を振州尾州にあ○日吉とひえともいふ住吉とすのえとらふが如く舊事記に日枝懐風藻に稗叡山と云えて麻田連陽春と云と云えり傳教より前此山を開きと云えり東鑑に金子山と云ふ三代實録に大比叡神小比叡神といふ大嶽に大ひえと云ふ西塔と横川の間に小ひえといふ扶桑明月集に崇神天皇元年甲申近江國滋賀郡小比叡東山金大巖傍天降矣と云ふ今山王と呼べ天台山乃地主乃金毘羅神と山王と稱せりともいふ傳教大師延暦寺と建し後七社と比しとも名く







くし詞はつれなきかたの神社啓蒙に櫻葉神明宮在洛陽朱雀東近衛  
西所祭天照大神也此宮上古在古近馬場五月荒手番之時大陽光華降下馬  
場之頭也故世人称云日降神明と云ふ折と降と音近と云ふ此説  
あり

△ひかり 老とより日明は乃美なるかへり○歌は景色乃かたよりみゆるの  
多し漢も光景とらりて我乃体よりていりとかげとて合ふる  
なり

ひがし 東とら日頭の美也とらり又ひんがしとらり日向ひこれ美なるか  
へりともらり一説はひがしと書てんがしとよむと習ひいふなり  
くがしはひらきともらり○東山の平安京の東山也將軍義政次東山殿とい  
ひ藤原實熙と東山左府と称すは是也左府乃著す所拾芥抄名目抄等  
あり

ひがく 万葉集に日方吹とらりて西乃風成らば假使よてもあつらり  
日の空よ吹と船人の語もひがくといふよひもあつらりて晚よ其方より吹は強  
なり

この物かきそすくもほどよかあつらりてふもふ也とらり○林園とよむも千  
瀉の美潮汐乃干とらり跡とらり歌よまほひのこもあつらり津守氏乃歌  
よ

朝あけのひらき成りけくまは山浦吹風とらりて白雲  
此ひらき二美と兼り湖水よひらきいふなり塩津山の東のかたなり  
二美とてあつらりてよみ出せるなり

ひがし 日次とらり日間乃美なるかへり○瞽眼とらりて禿語乃實伽羅也とら  
りまて新撰字鏡に瞽とて訓すまらり取語とらり○小鳥乃名もら  
り其眼乃瞽なりとて也鵲也といふ鵲字とよめかひ心持なり

ひがし 源氏に十六日ひがしとらりてあつらりて又ひがしとらりてあつらり  
諸説佛語と引とらりて附會多し大般若經に即便前進得到彼岸とて  
我邦上代は般若波羅密會行りれり生死と彼岸とて涅槃と彼岸と  
波羅密と到彼岸と翻すとらりて彼岸會といふとらりて七日の佛事日本よ  
のり行りれり西土天空よちあつらりて成りて砥平石録よるも春秋に中



昼夜過不及なり一母と時正とらふ日本後紀の國分僧の春秋二日月別七日存心金剛般若經と轉讀せしむれりとのりたり新古今集よ

今らふ入見はてとわらひぬれ法隆寺の西國のくまの空

日没觀乃意なりて二中乃入會とてけく日光乃赫奕なり觀て知れ天日天乃中道と廻る昼夜乃長短相ひとてとて也夫木集よ

くふあまの事此朝日しやまきとて西の方のりとも

○彼岸字と稱すふ山まわりくれとてはとてとて名く○四國辺と題と

も呼り

ふふ

控字乃意也詔各別錄よ唐改軍中書舍人掌詔詔皆屬一為

底一為宜とてえり大明會典よ底簿とてふもひとて乃帳也とて底本

ともあり

ひがく

千字文の陸とより庇陰とらふ日隱の系物よひとて此間と

もえ今しふとて○醫とてとてとも同系たり類篇よ醫は陰

也ともえり

ひがく

加茂かひとてり日御蔭の系あり新古今集よ

あふこの朝丹里の日の草豊のあらけとて成へ

是日ひがのうつりか指とてなる成へ○藏玉集よ天河原の苗代とて

らふとるえり

ひがかり

公賢家集よ

とて文の雪とてるるとてとてとてひがかりの時にぬけ

李部王記よ深夜讀書愛光栢中右記よ中、殿光栢用深草物とてえり燈蓋はらふ成へとてり

ひがのかつ

延喜式よ日蔭髪とてえり古事記よ天之日影とてひ神

代紀よ以羅羅為手織とてり松羅一名女羅是とてりも別種あると

今瓶乃瓜かせとてり物是とてり石松と新拾遺集よ玉おけとてり

大嘗會よ用あせとてり式よとてり出り今白糸青糸とてり組

く冠乃在右よ岳とてり其表物なりとてりひがの組ひが

乃糸とてりとてり盤中よ神乃とてりせたまひとてり時をてり旧



影う出んと言壽くたすをいふなりけり夜生内府  
乃歌

諸人乃かきひけの心著と天照神乃めをいふなりけり

道よかれへる泳後

△ひびき 樽風が水に号するも、保式帳にも舊事記古事記に氷木  
と水椽ととと火と防くまぬりと名はれといふと干木氷木の  
木の系うう其下と上へ水省くる差のきく本一ツの名ある故に通  
へるなり

ひびき 暮目とちり弓よるも、墓目音なりと蟾蜍の音なりと立  
るる音也其術の天地の生氣引意也なり又目が射り其形墓の  
目は似たりと名くといふ三談一統のひびきといひたり又山や  
の木也羽の鶴の本白也といふなり○東鑑に誕生の引目鳴弦の役載せ  
一事で多し皆重役也男児生る時に二度引目射り  
り竹根墓目東鑑にもいふなり○たう紙は扇的よる時に凡高木と

ひびき

ひびき 續紀にも少神代紀に領又帥減とあり率を同一引将の系也又  
将減の公羊傳よる親母將帥古往し將有其意といふなり○新撰字  
鏡に携とひびきといふなり

ひびき 食又戸といふ引手乃茶なり万葉集に、道と引手乃山といふ

ひびき 延喜式に皺文或は波文といふなり、蝦蟇皮乃系也といふなり新撰字  
鏡に絞と條、属又波文也といふなり又カ龍といふなり  
よ戸、引手といふなり○盛長記にひびきの内よこりなりわたりといふも戸  
といふなり

ひびき 延喜式に皺文或は波文といふなり、蝦蟇皮乃系也といふなり新撰字  
鏡に絞と條、属又波文也といふなり又カ龍といふなり

ひびき 倭名抄に獨蠶と訓し後撰集にもあり抽蚕乃茶神代紀に  
口裏含蠶得抽絲といふなり

ひびき 後茶といふも後世の事なや茶もたの音なりとちや又たなる  
とて物音と呼べり也河海も季御讀經に引茶といふ僧も茶といふなり



る也といふ雲岡抄にも茶の引茶の由施煎茶也といふ二條撰政記  
にも茶の昔より大やけのときれい給ふ物として侍せり大内にも茶園あり  
侍るにもも海人藻芥の上古大内は挽茶の節會あり其儀嚴也葉上  
僧正入唐乃時重茶乃種と得たり明惠上人是と玩たりとて茶の栴尾  
と本とするといふ筑前州背振の植る岩上茶は号する葉上僧正  
乃時也身密國師乃詩を行到茶山睡眼開といふも栴尾と指り宋人茶  
詩は幸得梅山信初嘗日本茶といふ春雨鈔茶乃歌よ

くろりある雨ふぬちうつてあけ栴尾山乃春乃若多

唐の茶飲は先春抽出黄金芽と見えり葉上僧正は宋西也入宋時茶  
乃製と詳しう喫茶養生記と撰り實朝公は進り又明惠はわくまろ  
其茶子と盛り一壺今も寺門あり俗は漢乃小柿といふも○茶  
乃初の類聚國史は弘仁六年令畿内並近江丹波播磨美濃道茶毎年  
獻之といふ行幸滋賀韓崎梵教寺大僧都永忠叟茶獻之といふも  
此は伊豆山中は自然生乃者多一本邦古より是あつて人知れども

いづりてんく神代は其名と聞さるる神供は用か例もあつて  
都良香鉄子銘は多煮茶茗飲味如何と書り惟宗孝言茶賛あり後  
朱雀帝の時より盛に説へるもといふ西土は群書備考は茶之名始見  
於王褒僮約盛於陸羽茶經而其稅則自唐始也といふ朝辭は唐大  
和二年は茶子と得るより東國通鑑は又えり○埃囊抄は十服茶記  
録と引其法と詳し書せり回茶の顔回貢茶の子貢一と聞ては知一  
と聞て二と知乃茶を取といふ○婚礼納聘乃時茶と副る事あり  
天中記は聘婦必以茶為礼儀九種茶樹必下子移種則不復生といふ  
といふ○職人歌合は茶をたて賣との名目は一ふく一錢といふ海  
東諸國記は人喜喫茶路傍置茶店賣茶行人投一文飲一碗といふ  
○今西土はも煎茶の也と明僧千呆乃話也といふ西土は始は龍團餅  
茶あり我邦は是と用か未茶のといふ用○海人藻芥は建蓋茶  
一服入湯と半むかり入る茶筍といふたつ時たふさく湯乃音の  
聞る極したつて顯弁上人といふ○宇治茶は初昔



後昔伊昔等乃号あり三月節後世日め茶芽と摘成例にせし日と合  
せ昔字也よく名とすといふ近き代の御製と

世れら茶のつ志のふりての地より後の昔と

又別儀といふ名目珠光の松花の清香茶とつめりて真壺のまき持  
過く茶とて故に蒸と火とよきより珠光乃別儀といふなり○  
鳥嵐同穴集の後鳥羽院乃御宇明恵上人茶乃實と宇治と柳屋と植とい  
つ一説は將軍足利義滿公大内氏に命して宇治に植しめらせしより  
始るといふといふ丹波國上林郷より居るといふ移せるといふ○茶湯とい  
ふなり天龍寺乃開山梵窓筑前崇福寺乃開山南浦入宋乃時持あり  
臺子と得く其式と定めしは僧寺此行儀多しとかやんし録倉に傳  
乃末年より起り高時千及箭乃城と攻しむる兵士百服茶湯とて遊  
興せしり及佐々木高氏宅中七所設七番茶賭物七百名本非茶七十碗以  
請義益又与衆六十三人遊為茶會と太平記に云えり百服茶の今も  
濃茶也又薄茶あり足利將軍義政公に至り上下盛に飲ひ豊太閤も及く

北野の茶會は茶家者流乃集る三百五十餘人といふ後天下に傳るとい  
り○宇治以乃説は茶と採り製する間濃茶と呼く白とて稀茶と呼  
く昔といふ収蔵乃後濃茶と呼く袋茶といひ稀茶と呼く詰茶といふ  
とて又脩治し七品と分ち定む曰鷹爪曰柳葉曰淡黄葉曰薄葉曰金葉曰骨  
曰蠶尾也といふ○舶来乃者と唐茶といふ又阿蘭陀茶あり茗の茶乃晚く  
取也積の昔茶也といふ一種乃生木江戸種藝家あり葉大し厚と云ふ此  
葉蘆也といふ○雜纂に討花喫茶は殺風景に入るとり日老乃いたるといふ  
いと茶と代り用るといふ

ひそおび 古事記に衿とよりの倭名扱同一引帯乃系束帯とあり水細  
記にも

ひそわらひ 官府よりよる解由乃意也年貢と納むは百姓乃内の番と  
ありりる法解戸といふ納めりる解庫也○神代紀に界とよりの  
界繩といふ又冒法といふ絡繩といふ○口語に交割乃義也  
ひそわらひ 檀紙といふ男女乃志と通りと艶書に紙と用かるといふ



名くといつ西土乃書松皮紙と云えり○東海一編集紙謂之  
引合と云えり繭紙ハ唐書日本國使者真人與能善書其紙似  
繭而澤人莫識と云えり初字記吳人以繭と云えり一説今  
乃奉書紙也と云り

ひまごとの 江次第遺書出物馬一匹并送物と云え北山抄大饗乃條  
よも奉出物馬鷹あり名義知ぬ十訓抄公任郷小野乃大臣殿  
と云ひまごとの時朗詠上下卷と云ひまごとの置物乃厨子よかせり  
けるゆい引出物と云と云えり○皆礼か馬あつても  
しつ部類鈔正和五年新院為花御寛御幸圓通寺為御引物  
驚眼一匹と云え東鑑も處々其義と云庭訓往來引手物  
よ他

△ひく 引牽抽擗かと云あり日往乃義や○瑟琴と鼓又彈と訓  
せりと云長く寸意らひ○綿とひく擴綿とやり○草とひく  
又とひくふと抽字擗字乃意也○裾とひく曳字也漢雜陽傳不

可曳長裾乎と云○臼とひく牽轉乃義磨と云り○樓字とやり  
踰東家牆樓其處予乃類也○新撰字鏡根と云ひくとやり○  
衆と物と給ふと云らり人の心とひくと云る物ハ輕重とひくと云るならず  
もらり關とひくと云む彎と同一○湯とひくと云らり辭も落く  
や物語と云えり○算とひく准字と譯せりひまごと云す也○引  
津ハ菟前とあり

ひく 繩と云ふふごの類とらひ銅山と云ふと云る是也○比五ハ律僧  
と云ふ○耳とみく乃びくと云らり

ひく乃やは乃 俗諺也祇園會ハ山ほと云り山ほと云る出入町ハ技町あり  
りハ年貢と云ふ佳例ハ其日ハ持參す其時酒と云ふ甚  
急かと云ふ乃ひく乃山と云ふ○寄抄悪李  
吟

△ひけ 俗ハひけと云ふもひけと云ふ軍乃驅引乃出る詞あり  
あらうらうハ口舌ハひくのやまく抄ありの味の要と云ふ



又此與乃音轉ありともいふ

ひげ 倭名抄に鬚<sup>ヒゲ</sup>か<sup>ヒゲ</sup>つ<sup>ヒゲ</sup>ひげ鬚<sup>ヒゲ</sup>次<sup>ヒゲ</sup>ありつ<sup>ヒゲ</sup>ひげ<sup>ヒゲ</sup>とあり<sup>ヒゲ</sup>鬚<sup>ヒゲ</sup>毛<sup>ヒゲ</sup>の<sup>ヒゲ</sup>義<sup>ヒゲ</sup>と  
い<sup>ヒゲ</sup>つ<sup>ヒゲ</sup>全<sup>ヒゲ</sup>浙<sup>ヒゲ</sup>兵<sup>ヒゲ</sup>制<sup>ヒゲ</sup>に<sup>ヒゲ</sup>三<sup>ヒゲ</sup>了<sup>ヒゲ</sup>鬚<sup>ヒゲ</sup>と<sup>ヒゲ</sup>こ<sup>ヒゲ</sup>ひ<sup>ヒゲ</sup>げ<sup>ヒゲ</sup>と<sup>ヒゲ</sup>譯<sup>ヒゲ</sup>せ<sup>ヒゲ</sup>り<sup>ヒゲ</sup>又<sup>ヒゲ</sup>鬚<sup>ヒゲ</sup>の<sup>ヒゲ</sup>う<sup>ヒゲ</sup>ひ<sup>ヒゲ</sup>げ<sup>ヒゲ</sup>鬚<sup>ヒゲ</sup>の<sup>ヒゲ</sup>去<sup>ヒゲ</sup>  
ひ<sup>ヒゲ</sup>げ<sup>ヒゲ</sup>鬚<sup>ヒゲ</sup>の<sup>ヒゲ</sup>類<sup>ヒゲ</sup>ひ<sup>ヒゲ</sup>げ<sup>ヒゲ</sup>と<sup>ヒゲ</sup>い<sup>ヒゲ</sup>つ<sup>ヒゲ</sup>り<sup>ヒゲ</sup>○鬚<sup>ヒゲ</sup>と<sup>ヒゲ</sup>剃<sup>ヒゲ</sup>の<sup>ヒゲ</sup>東<sup>ヒゲ</sup>照<sup>ヒゲ</sup>宮<sup>ヒゲ</sup>乃<sup>ヒゲ</sup>時<sup>ヒゲ</sup>より<sup>ヒゲ</sup>此<sup>ヒゲ</sup>事<sup>ヒゲ</sup>とい<sup>ヒゲ</sup>つ<sup>ヒゲ</sup>  
豊<sup>ヒゲ</sup>太<sup>ヒゲ</sup>閤<sup>ヒゲ</sup>乃<sup>ヒゲ</sup>像<sup>ヒゲ</sup>よ<sup>ヒゲ</sup>長<sup>ヒゲ</sup>須<sup>ヒゲ</sup>あり<sup>ヒゲ</sup>加<sup>ヒゲ</sup>藤<sup>ヒゲ</sup>濟<sup>ヒゲ</sup>正<sup>ヒゲ</sup>美<sup>ヒゲ</sup>鬚<sup>ヒゲ</sup>乃<sup>ヒゲ</sup>名<sup>ヒゲ</sup>あり<sup>ヒゲ</sup>大<sup>ヒゲ</sup>猷<sup>ヒゲ</sup>院<sup>ヒゲ</sup>公<sup>ヒゲ</sup>類<sup>ヒゲ</sup>鬚<sup>ヒゲ</sup>を  
剃<sup>ヒゲ</sup>く<sup>ヒゲ</sup>今<sup>ヒゲ</sup>乃<sup>ヒゲ</sup>風<sup>ヒゲ</sup>俗<sup>ヒゲ</sup>と<sup>ヒゲ</sup>い<sup>ヒゲ</sup>つ<sup>ヒゲ</sup>り<sup>ヒゲ</sup>○俗<sup>ヒゲ</sup>諺<sup>ヒゲ</sup>に<sup>ヒゲ</sup>詣<sup>ヒゲ</sup>諛<sup>ヒゲ</sup>乃<sup>ヒゲ</sup>者<sup>ヒゲ</sup>と<sup>ヒゲ</sup>い<sup>ヒゲ</sup>ひ<sup>ヒゲ</sup>け<sup>ヒゲ</sup>乃<sup>ヒゲ</sup>塵<sup>ヒゲ</sup>と<sup>ヒゲ</sup>取<sup>ヒゲ</sup>り<sup>ヒゲ</sup>  
ハ<sup>ヒゲ</sup>事<sup>ヒゲ</sup>文<sup>ヒゲ</sup>類<sup>ヒゲ</sup>聚<sup>ヒゲ</sup>よ<sup>ヒゲ</sup>丁<sup>ヒゲ</sup>晋<sup>ヒゲ</sup>公<sup>ヒゲ</sup>魏<sup>ヒゲ</sup>萊<sup>ヒゲ</sup>公<sup>ヒゲ</sup>會<sup>ヒゲ</sup>食<sup>ヒゲ</sup>せ<sup>ヒゲ</sup>ハ<sup>ヒゲ</sup>美<sup>ヒゲ</sup>魏<sup>ヒゲ</sup>萊<sup>ヒゲ</sup>公<sup>ヒゲ</sup>乃<sup>ヒゲ</sup>鬚<sup>ヒゲ</sup>と<sup>ヒゲ</sup>深<sup>ヒゲ</sup>  
一<sup>ヒゲ</sup>と<sup>ヒゲ</sup>丁<sup>ヒゲ</sup>晋<sup>ヒゲ</sup>公<sup>ヒゲ</sup>起<sup>ヒゲ</sup>く<sup>ヒゲ</sup>排<sup>ヒゲ</sup>ふ<sup>ヒゲ</sup>と<sup>ヒゲ</sup>い<sup>ヒゲ</sup>つ<sup>ヒゲ</sup>り<sup>ヒゲ</sup>

ひけらかき 人<sup>ヒゲ</sup>の<sup>ヒゲ</sup>街<sup>ヒゲ</sup>と<sup>ヒゲ</sup>い<sup>ヒゲ</sup>ふ<sup>ヒゲ</sup>俗<sup>ヒゲ</sup>語<sup>ヒゲ</sup>也<sup>ヒゲ</sup>と<sup>ヒゲ</sup>い<sup>ヒゲ</sup>つ<sup>ヒゲ</sup>る<sup>ヒゲ</sup>ぬ<sup>ヒゲ</sup>も<sup>ヒゲ</sup>照<sup>ヒゲ</sup>及<sup>ヒゲ</sup>ふ<sup>ヒゲ</sup>と<sup>ヒゲ</sup>考<sup>ヒゲ</sup>ふ<sup>ヒゲ</sup>と<sup>ヒゲ</sup>い<sup>ヒゲ</sup>つ<sup>ヒゲ</sup>る<sup>ヒゲ</sup>

ひこ 彦<sup>ヒゲ</sup>字<sup>ヒゲ</sup>と<sup>ヒゲ</sup>い<sup>ヒゲ</sup>つ<sup>ヒゲ</sup>り<sup>ヒゲ</sup>古<sup>ヒゲ</sup>事<sup>ヒゲ</sup>記<sup>ヒゲ</sup>に<sup>ヒゲ</sup>日<sup>ヒゲ</sup>子<sup>ヒゲ</sup>と<sup>ヒゲ</sup>填<sup>ヒゲ</sup>り<sup>ヒゲ</sup>男<sup>ヒゲ</sup>子<sup>ヒゲ</sup>乃<sup>ヒゲ</sup>美<sup>ヒゲ</sup>称<sup>ヒゲ</sup>也<sup>ヒゲ</sup>韻<sup>ヒゲ</sup>會<sup>ヒゲ</sup>に<sup>ヒゲ</sup>彦<sup>ヒゲ</sup>常<sup>ヒゲ</sup>  
也<sup>ヒゲ</sup>美<sup>ヒゲ</sup>也<sup>ヒゲ</sup>と<sup>ヒゲ</sup>い<sup>ヒゲ</sup>ふ<sup>ヒゲ</sup>古<sup>ヒゲ</sup>事<sup>ヒゲ</sup>記<sup>ヒゲ</sup>に<sup>ヒゲ</sup>豊<sup>ヒゲ</sup>玉<sup>ヒゲ</sup>姫<sup>ヒゲ</sup>の<sup>ヒゲ</sup>白<sup>ヒゲ</sup>其<sup>ヒゲ</sup>日<sup>ヒゲ</sup>子<sup>ヒゲ</sup>言<sup>ヒゲ</sup>と<sup>ヒゲ</sup>い<sup>ヒゲ</sup>ふ<sup>ヒゲ</sup>彦<sup>ヒゲ</sup>火<sup>ヒゲ</sup>火<sup>ヒゲ</sup>出<sup>ヒゲ</sup>見<sup>ヒゲ</sup>尊<sup>ヒゲ</sup>  
ふ<sup>ヒゲ</sup>つ<sup>ヒゲ</sup>夫<sup>ヒゲ</sup>と<sup>ヒゲ</sup>い<sup>ヒゲ</sup>ふ<sup>ヒゲ</sup>如<sup>ヒゲ</sup>一<sup>ヒゲ</sup>又<sup>ヒゲ</sup>比<sup>ヒゲ</sup>古<sup>ヒゲ</sup>運<sup>ヒゲ</sup>と<sup>ヒゲ</sup>い<sup>ヒゲ</sup>ふ<sup>ヒゲ</sup>彦<sup>ヒゲ</sup>父<sup>ヒゲ</sup>乃<sup>ヒゲ</sup>義<sup>ヒゲ</sup>也<sup>ヒゲ</sup>今<sup>ヒゲ</sup>世<sup>ヒゲ</sup>乃<sup>ヒゲ</sup>俗<sup>ヒゲ</sup>に<sup>ヒゲ</sup>其<sup>ヒゲ</sup>文<sup>ヒゲ</sup>と  
か<sup>ヒゲ</sup>や<sup>ヒゲ</sup>ら<sup>ヒゲ</sup>し<sup>ヒゲ</sup>と<sup>ヒゲ</sup>い<sup>ヒゲ</sup>ふ<sup>ヒゲ</sup>如<sup>ヒゲ</sup>一<sup>ヒゲ</sup>○日<sup>ヒゲ</sup>本<sup>ヒゲ</sup>紀<sup>ヒゲ</sup>倭<sup>ヒゲ</sup>名<sup>ヒゲ</sup>抄<sup>ヒゲ</sup>に<sup>ヒゲ</sup>孫<sup>ヒゲ</sup>次<sup>ヒゲ</sup>乃<sup>ヒゲ</sup>義<sup>ヒゲ</sup>と<sup>ヒゲ</sup>い<sup>ヒゲ</sup>ふ<sup>ヒゲ</sup>と<sup>ヒゲ</sup>通<sup>ヒゲ</sup>と<sup>ヒゲ</sup>重<sup>ヒゲ</sup>と<sup>ヒゲ</sup>い<sup>ヒゲ</sup>ふ

子<sup>ヒゲ</sup>と<sup>ヒゲ</sup>い<sup>ヒゲ</sup>ふ<sup>ヒゲ</sup>意<sup>ヒゲ</sup>や<sup>ヒゲ</sup>今<sup>ヒゲ</sup>俗<sup>ヒゲ</sup>曾<sup>ヒゲ</sup>孫<sup>ヒゲ</sup>と<sup>ヒゲ</sup>い<sup>ヒゲ</sup>つ<sup>ヒゲ</sup>り<sup>ヒゲ</sup>○喉<sup>ヒゲ</sup>よ<sup>ヒゲ</sup>ひ<sup>ヒゲ</sup>こ<sup>ヒゲ</sup>と<sup>ヒゲ</sup>い<sup>ヒゲ</sup>ふ<sup>ヒゲ</sup>ひ<sup>ヒゲ</sup>こ<sup>ヒゲ</sup>と<sup>ヒゲ</sup>略<sup>ヒゲ</sup>と<sup>ヒゲ</sup>い<sup>ヒゲ</sup>ふ<sup>ヒゲ</sup>○衣<sup>ヒゲ</sup>  
よ<sup>ヒゲ</sup>ら<sup>ヒゲ</sup>ふ<sup>ヒゲ</sup>孫<sup>ヒゲ</sup>より<sup>ヒゲ</sup>出<sup>ヒゲ</sup>る<sup>ヒゲ</sup>や<sup>ヒゲ</sup>○彦<sup>ヒゲ</sup>島<sup>ヒゲ</sup>と<sup>ヒゲ</sup>長<sup>ヒゲ</sup>門<sup>ヒゲ</sup>國<sup>ヒゲ</sup>也<sup>ヒゲ</sup>

ひこぞえ 倭<sup>ヒゲ</sup>名<sup>ヒゲ</sup>抄<sup>ヒゲ</sup>に<sup>ヒゲ</sup>葉<sup>ヒゲ</sup>と<sup>ヒゲ</sup>い<sup>ヒゲ</sup>つ<sup>ヒゲ</sup>る<sup>ヒゲ</sup>書<sup>ヒゲ</sup>に<sup>ヒゲ</sup>由<sup>ヒゲ</sup>葉<sup>ヒゲ</sup>と<sup>ヒゲ</sup>い<sup>ヒゲ</sup>ふ<sup>ヒゲ</sup>孫<sup>ヒゲ</sup>生<sup>ヒゲ</sup>乃<sup>ヒゲ</sup>義<sup>ヒゲ</sup>と<sup>ヒゲ</sup>い<sup>ヒゲ</sup>ふ<sup>ヒゲ</sup>一<sup>ヒゲ</sup>新<sup>ヒゲ</sup>撰<sup>ヒゲ</sup>字<sup>ヒゲ</sup>  
鏡<sup>ヒゲ</sup>と<sup>ヒゲ</sup>穂<sup>ヒゲ</sup>と<sup>ヒゲ</sup>い<sup>ヒゲ</sup>ふ<sup>ヒゲ</sup>美<sup>ヒゲ</sup>と<sup>ヒゲ</sup>い<sup>ヒゲ</sup>ふ<sup>ヒゲ</sup>と<sup>ヒゲ</sup>い<sup>ヒゲ</sup>ふ<sup>ヒゲ</sup>童<sup>ヒゲ</sup>蒙<sup>ヒゲ</sup>頌<sup>ヒゲ</sup>韻<sup>ヒゲ</sup>と<sup>ヒゲ</sup>撰<sup>ヒゲ</sup>と<sup>ヒゲ</sup>い<sup>ヒゲ</sup>ふ

ひこづらふ 古<sup>ヒゲ</sup>事<sup>ヒゲ</sup>記<sup>ヒゲ</sup>乃<sup>ヒゲ</sup>歌<sup>ヒゲ</sup>よ<sup>ヒゲ</sup>ら<sup>ヒゲ</sup>萬<sup>ヒゲ</sup>葉<sup>ヒゲ</sup>集<sup>ヒゲ</sup>よ<sup>ヒゲ</sup>ら<sup>ヒゲ</sup>文<sup>ヒゲ</sup>選<sup>ヒゲ</sup>と<sup>ヒゲ</sup>繪<sup>ヒゲ</sup>拵<sup>ヒゲ</sup>と<sup>ヒゲ</sup>い<sup>ヒゲ</sup>ふ<sup>ヒゲ</sup>り<sup>ヒゲ</sup>ひ<sup>ヒゲ</sup>こ<sup>ヒゲ</sup>づ<sup>ヒゲ</sup>ら<sup>ヒゲ</sup>ふ<sup>ヒゲ</sup>  
と<sup>ヒゲ</sup>い<sup>ヒゲ</sup>つ<sup>ヒゲ</sup>る<sup>ヒゲ</sup>あ<sup>ヒゲ</sup>ら<sup>ヒゲ</sup>ふ<sup>ヒゲ</sup>今<sup>ヒゲ</sup>ひ<sup>ヒゲ</sup>こ<sup>ヒゲ</sup>づ<sup>ヒゲ</sup>ら<sup>ヒゲ</sup>ふ<sup>ヒゲ</sup>と<sup>ヒゲ</sup>い<sup>ヒゲ</sup>つ<sup>ヒゲ</sup>る<sup>ヒゲ</sup>ひ<sup>ヒゲ</sup>も<sup>ヒゲ</sup>詞<sup>ヒゲ</sup>同<sup>ヒゲ</sup>一<sup>ヒゲ</sup>源<sup>ヒゲ</sup>氏<sup>ヒゲ</sup>と<sup>ヒゲ</sup>い<sup>ヒゲ</sup>ふ<sup>ヒゲ</sup>と<sup>ヒゲ</sup>い<sup>ヒゲ</sup>ふ

らひ又ひこぞらふひとらふも同語あり

△ひざ 膝<sup>ヒゲ</sup>と<sup>ヒゲ</sup>い<sup>ヒゲ</sup>つ<sup>ヒゲ</sup>り<sup>ヒゲ</sup>引<sup>ヒゲ</sup>か<sup>ヒゲ</sup>き<sup>ヒゲ</sup>た<sup>ヒゲ</sup>の<sup>ヒゲ</sup>義<sup>ヒゲ</sup>と<sup>ヒゲ</sup>い<sup>ヒゲ</sup>ふ<sup>ヒゲ</sup>一<sup>ヒゲ</sup>○物<sup>ヒゲ</sup>よ<sup>ヒゲ</sup>小<sup>ヒゲ</sup>膝<sup>ヒゲ</sup>と<sup>ヒゲ</sup>い<sup>ヒゲ</sup>つ<sup>ヒゲ</sup>る<sup>ヒゲ</sup>事<sup>ヒゲ</sup>と<sup>ヒゲ</sup>い<sup>ヒゲ</sup>ふ<sup>ヒゲ</sup>○  
佛<sup>ヒゲ</sup>者<sup>ヒゲ</sup>乃<sup>ヒゲ</sup>右<sup>ヒゲ</sup>膝<sup>ヒゲ</sup>着<sup>ヒゲ</sup>地<sup>ヒゲ</sup>ハ<sup>ヒゲ</sup>胡<sup>ヒゲ</sup>法<sup>ヒゲ</sup>と<sup>ヒゲ</sup>い<sup>ヒゲ</sup>つ<sup>ヒゲ</sup>る<sup>ヒゲ</sup>ハ<sup>ヒゲ</sup>樂<sup>ヒゲ</sup>記<sup>ヒゲ</sup>に<sup>ヒゲ</sup>卧<sup>ヒゲ</sup>坐<sup>ヒゲ</sup>致<sup>ヒゲ</sup>右<sup>ヒゲ</sup>と<sup>ヒゲ</sup>い<sup>ヒゲ</sup>ふ<sup>ヒゲ</sup>ハ<sup>ヒゲ</sup>三<sup>ヒゲ</sup>代<sup>ヒゲ</sup>も<sup>ヒゲ</sup>亦<sup>ヒゲ</sup>此<sup>ヒゲ</sup>

礼<sup>ヒゲ</sup>あり<sup>ヒゲ</sup>ハ<sup>ヒゲ</sup>濟<sup>ヒゲ</sup>北<sup>ヒゲ</sup>集<sup>ヒゲ</sup>よ<sup>ヒゲ</sup>ら<sup>ヒゲ</sup>申<sup>ヒゲ</sup>○倭<sup>ヒゲ</sup>名<sup>ヒゲ</sup>抄<sup>ヒゲ</sup>に<sup>ヒゲ</sup>膝<sup>ヒゲ</sup>削<sup>ヒゲ</sup>と<sup>ヒゲ</sup>い<sup>ヒゲ</sup>ふ<sup>ヒゲ</sup>乃<sup>ヒゲ</sup>か<sup>ヒゲ</sup>り<sup>ヒゲ</sup>と<sup>ヒゲ</sup>い<sup>ヒゲ</sup>ふ<sup>ヒゲ</sup>り<sup>ヒゲ</sup>今<sup>ヒゲ</sup>  
ひ<sup>ヒゲ</sup>ざ<sup>ヒゲ</sup>と<sup>ヒゲ</sup>い<sup>ヒゲ</sup>つ<sup>ヒゲ</sup>り<sup>ヒゲ</sup>○豊<sup>ヒゲ</sup>州<sup>ヒゲ</sup>と<sup>ヒゲ</sup>い<sup>ヒゲ</sup>つ<sup>ヒゲ</sup>る<sup>ヒゲ</sup>ハ<sup>ヒゲ</sup>薩<sup>ヒゲ</sup>州<sup>ヒゲ</sup>と<sup>ヒゲ</sup>い<sup>ヒゲ</sup>つ<sup>ヒゲ</sup>る<sup>ヒゲ</sup>ハ<sup>ヒゲ</sup>南<sup>ヒゲ</sup>部<sup>ヒゲ</sup>と<sup>ヒゲ</sup>い<sup>ヒゲ</sup>つ<sup>ヒゲ</sup>る<sup>ヒゲ</sup>

ざがふ哉後よ武射かぬとらふ  
ひま<sup>ヒゲ</sup>一<sup>ヒゲ</sup> 久<sup>ヒゲ</sup>と<sup>ヒゲ</sup>い<sup>ヒゲ</sup>つ<sup>ヒゲ</sup>る<sup>ヒゲ</sup>ひ<sup>ヒゲ</sup>と<sup>ヒゲ</sup>い<sup>ヒゲ</sup>つ<sup>ヒゲ</sup>る<sup>ヒゲ</sup>ハ<sup>ヒゲ</sup>神<sup>ヒゲ</sup>代<sup>ヒゲ</sup>直<sup>ヒゲ</sup>指<sup>ヒゲ</sup>披<sup>ヒゲ</sup>と<sup>ヒゲ</sup>い<sup>ヒゲ</sup>ふ<sup>ヒゲ</sup>日<sup>ヒゲ</sup>去<sup>ヒゲ</sup>乃<sup>ヒゲ</sup>義<sup>ヒゲ</sup>と



いづる靈異記の淹とよあり出羽よそひひやうとらふ華嚴經維摩經よ久如  
くとる由の幾時とらふよ同一○関西関東よ口語よらふとやつと  
ひ又とつとらふ出羽よよらふとらふ世通の意あり○物よ庇とも  
いづる日指のふありと内日指とわらふとらふ廂も同一清齊位置よ倭漆  
經廂ともるも金葉集よ逢事のふとらふとらふはらやめよとらふふも二  
意と兼るも新撰字鏡よ髮とひとらふとらふ屋翼也と注せり又宋成屋の  
ひとらふとらふとらふけふとらふ閑情寓寄よ活捨とらふ○関西よ尾岳  
とらふとらふ越後よとらふとらふ

ひさげ 枕草紙よひさげろえとらふ資暇録よ偏提とらふ拾遺記よ元  
和間謂之注子仇子良惡同邦注名去柄安繫名偏提とらふ神宮雜例  
集よ授と記せり海人藻芥よ授の右の手とらふ持つ尤乃手と寄とらふ  
とらふ  
ひさく 鬻とよあり取も同一提賣のふとらふ○ひさく人ひさくめい倭  
名鈔よ裨取取婦とよあり取やすく買てたう賣とらふ

ひさめ 日本紀和名鈔よ雨水とよあり字乃如一又大雨とらふ万葉集よ  
霏霖とよあり和名鈔よ霏の大雨とらふ日本紀よ一處大雨とらふ和名  
鈔よ引とらふ大雨乃誤寫ありと世俗よ火の雨とらふ心得一も是也即集  
節乃水雨の霖火雨の滴とらふ別あり○取婦とひさめとらふと略  
とらふとらふとらふ又轉してひさめとらふ埃囊抄よとらふ  
取婦の周禮よ見由

ひさか 天乃枕辞よいづる又空とも日月も月も星も雲も雨も風  
けとらふ或と都ともつつけよめとらふ天都の意ありと鏡もつつけり  
天鏡乃るありと又たひさかとのとらひく空乃る月乃事とらふ  
と歌もとらふ久とらふ乃光のとらふと春乃日とらふとらふ万葉集よ  
久方又久堅よ作とらふ天先成とあせと久方とらふと漢各乃注よ湯  
か天休堅清之状ともとらふと續日本後記乃長歌よ飄葛と書るハ訓  
と假とらふとのとらふと礼記よ器用陶匏以象天地之性也とらふと匏象  
のともとらふとらふ



いごころく 跪とよめり膝曲衝乃る之文武紀は傳百官跪伏之禮と云  
ゆえに紀略は早達貴而跪等不論男女一依唐法と云仁乃詔よえ  
たり○高ひざまふと云くは草紙よえたり長跪ある一○王  
世負り坐行と解し古入膝坐故也と云ふ跪し膝して歩  
進むと云ふ

ひさごふふ 日本紀は東髮於額と云くは額花乃形と状するたふ  
額は間く花形がくの花は折らけつゆふ又鷹ふちと種と云ふ  
しも一寸或は五分と皆執花と云ふ

こい左のくみはつけ右まゆははとつと云ふ  
△ひー 菱子と訓せり疾藜もよめり鱧蹄乃る菱のひー蔓も  
らつ菱は兩種あり小ふは黒菱と云ふ

稜脆一參河國岩堀乃菱は二稜と云ふ  
重菱は又三重たす中菱とも云ふ正中飾記は倭衣裳乃るは紺地文

せんてん菱とも云ふ又武田菱は割菱也元祖新羅三郎義光の事  
起る又折入菱あり入子菱花菱立菱横菱一菱重菱遠菱四つ菱あり幕  
の紋は松皮菱と云ふなり○ひー餅はかきと云ふひー並との也菱  
花鏡は据ると云ふひー餅と云ふ花はらと云ふ○軍用はらつは通鑑は  
鉄菱と云ふなり○和名鈔は管と訓せり魚と取乃具之三稜は菱の  
如くふるく伊勢はく川は穴とほりて上は柴と覆ひて魚と集むると云  
りこれと云ふはつげふるなり○同書は又と訓せり征戦乃具之明律は魚又  
禾又あり魚とつと稻と云ふなり○隼人乃俗は海中乃洲と云  
ふは馬車ひしと云ふなり○古事談はひふと云ふは鳴音也○著聞集  
草よひよふと云ふはかけて俗はひしと頼むと云ふはひしと云ふは  
緊字をよめり又靡持乃字彼是乃字ふと用ふは穩なり或は必之或は  
必至或は必死の意とあり



ひしり 日本紀に聖字とあり万葉集に日知とあり日徳と知とあり  
 と聖天子乃稱之又大人とあり西土とも天子と聖とあり我邦  
 日知乃意と西土と異なり天の日嗣とあり皇孫の尊と申奉る之  
 ○聖神の古事記舊事記より和泉國和泉郡聖神社所祭の神是也  
 三代實録に貞現元年和泉國聖神社為從五位下とあり信  
 大山より○万葉集に酒乃名とひしりといふことあり信乃徐選  
 故事に辭客謂清者為聖人濁者為賢人といふことあり○物語に  
 ありき名徳乃僧とせり今世にて其真似とする者乃通稱とあり  
 ○源氏に俗ひありといふ東坡山谷ふと自ら有髪乃僧在家の僧ふ  
 と詩に作る意之高懸ひしり多信西乃末子按察使乃君より起り  
 とあり名利の衲子の稱とありともあり○  
 ひしりけ 日本紀に天陰とあり日乃あけ  
 ひしりわ 林氏説に物乃ひすといふ也といふ又基乃聖目と訓むかきも  
 あり凌然とあり

ひしりけ 孟子に孔子に聖の時ある者人と見えたり年中行事歌合

秋奠

かゝ人のしるはけは時と見えたり

△ひす 飛龍と書り今漢渡乃物あり

ひしり 神代紀に日隅宮あり俗に物乃ひすといふ此をひすといひ

墨と書り一説に日隅も大己貴神乃ひすとあり乃とて申事とあり隠

去もとて申事とあり

ひすとも 倭名鈔に鹿尾菜とあり天長中停太宰府貢鹿尾脯とあり

も是なり一漳州府志より羊抽菜也といふ伊勢物語にふしとあり

又とあり今とあり干杉は藻乃とあり伊勢物語に歌よとあり清

濁もかよふとあり是は送るのうらみとあり詞賦に設る料ふ

まの也万葉集に高安王の巽と娘子の贈り如一角のふしといふ

土九人の衾とあり○古本に緇裳と各一本の衾とあり共

の語ありとあり和名鈔座臥部に袞毛席以出色絲為之とあり



賦役令よと毛一と織るもの賣る事けは古の用おらるり  
ひすま一 五節乃下部より類聚雜要に種洗と書り物語にひすま一  
けんひすま一とありぬと乃あそぶとてかゝる類にれ乾清  
乃あそぶ一とあり及ひて女工の賤業とて名目よとてやあそぶ  
すはしとあり

ひすかしま 器字とあり日本紀に腹とすかしまとよみ恨といすか  
とよみ皆同義と今俗ひとては此處より一とありぬとては  
か侍らぬとてかしまとてかまじかといふ詞也○新撰字鏡に新  
とひすまごといふあり

△ひせ 新撰字鏡に嶋とあり字訓も心得かゝる○琉球よと八重  
干瀬といふ所あり海中乃破礁南北五里よりわたり

ひぜん 肥前乃國に倭名抄よひららけくとあり今音とあり  
とて火國に枕鳥あり肥後のひのこらありとあり○疥とひぜんと  
らふも肥瘠とあり又南蠻の邪法肥前嶋原よ起り其宗人よ依託

一征夫よ依託しとて世よ周く流布せりよく肥前瘡と呼らる是と  
亦疫瘍なり

△ひそ 倭名鈔造作具に檜楚とあり細木と名く延喜式に以檜竿  
為天井とありとあり

ひそく 日本紀に陰字とあり日底乃あそぶ一と隱密乃意にひそや  
うもらるる潜字も同一私字竊字に多く謙辭に用わたり靈異  
記に諱又偷とあり晏嘿とひそくといふとあり○新撰字鏡に  
際とひそくといふあり

ひそむ 聲字とありひそくより轉せりとあり眉とよらる先で  
口のまげむとあり嘸字也○聲とひそむと悄聲と見ゆ

ひそく 源氏よひそくやとあり物とるるひそく秘色也青磁の器  
物といふたり李部王記云天曆五年六月九日御膳沈香折敷四枚瓶用秘色  
宋葉實々筆衡一近世不貴金玉而貴銅瓷遂有秘色瓷器乃錢氏有國日  
越州燒進臣庶不得用故云秘色とあり○衣の色とあり瑠璃色



△ひく 日本紀の常字頓字ナリ訓せり日之の義なる一又直字と  
 もよあり○俗語乃ひくくも頓の義やらつらつらも同一又  
 ひくくのももらふ○歌山田乃ひくくも引板乃義なるこも  
 らう新勅撰集の秋田もひくくも引板乃義なるこも得るこも  
 葉集の客乃廬とええく姓乃びも遠と處乃田とらえ○猪麻と怖す  
 流落る水只板とらく、水とせまかきと動揺志く鳴こも甚く響  
 と高し西土の水牌とらふ以板激水以鼓之田間防禽獸之器也宛委餘  
 篇よええらう○姓は日田乃東鑑よも

ひく 衣裳乃摺畳と發積とらふ是くはひくく乃略と和名致よひくくめと  
 訓せりぬの縫ぬふらふくくく新撰字鏡の鼓も訓せり又絹とよひく  
 ぐとよあり○飛彈乃國乃名も國体乃衣乃ひくく似よる山深く淵嶮く  
 く釣拵籠渡ふど乃名あり後漢書の跋涉懸度とらふ如く師古註の懸  
 度ハ懸繩而度也とらふ○姓氏録の城田とらふもひくく

ひく 鶴林玉露の錢薄悪者曰怪錢とらえらう鏹ハ造り字ハ城文も訓  
 也ひくくく階書ハ除其内郭とらふ意あり一應永十八年八月乃大風  
 相州三崎の唐船漂着せり船中数万貫乃永樂錢ありて關東是と通  
 用とらふ他錢も同一將軍義持公乃時也其後北條氏康關八州を従一  
 比永樂錢乃と用わくも異朝代々乃古錢と悪錢とと悪錢ハ皆上方  
 よ至りけはより鏹と京錢と名く最初も永樂一錢と鏹四錢と充用  
 慶長十一年より永樂と禁止せらるる○修驗家より結字と  
 よあり

ひく 日本紀の頓立とらふ字詩經よる  
 ひく 龍とらふ南面すと東よらと日垂とらふ日乃天と象  
 と出と意へ○九右とらふ秩父とらふト奥州の鑿方植方  
 し云  
 ひく 神代紀の養字とらふ古事記の日足と書り赤子と養育一成人  
 とらふ神代紀の子養又長養とも日足とす







あんまき...  
 山槐記明月記よ...  
 保元物語よ錦乃直岳と...  
 兼薄衣乃板乃物...  
 地副将き紫地也...  
 伊勢下總入道乃書よ...  
 俗よ大紋...

ひくく 埃囊抄よ雷同と訓せり太平記よ混と...  
 源氏よ...  
 乃身と...  
 韓志和...  
 と踏す...  
 祐乘...  
 乃間桃核と得...  
 立日言乃神と崇...



ひらうまへ 元前の衣衣服に就て所謂神社也續日本紀今若襟とあり  
又えとて我邦の古も知ぬ一今も蝦夷に俗に神社とて○俗に事の  
自由ありとて喻へしより習ひしより成りたり

ひたひが 万葉集に額髪結ユル在しええとて古事記に小碓命の事其御  
髪結額也とて日本紀に年十五六間東髪於額とあり又新六帖に振つる  
髪ひの髪もよあり額髪にぬがしと訓しとて倭名鏡にええとて

○源氏に尼の事よありひがとてさつりて書に昔にたを尼とて喝食カシキとの  
扱は肩までかとよとてかゝり也

ひたひがめ 定額とて也續日本紀に額字とてめとあり小学陳注に  
額猶敷也とて定額に寺家寺田と具て格式ある寺と定額寺とらふ  
類也徒然神の諸寺の僧のよもありと定額の女孺とて事延喜式にええ  
とて数とてさつたる公人乃通号とてとらふ

ひたひがの 六月後詞に大和の國の四方は真秀マホとてかめと譬へらふ也  
今と日の中空ぬる日高とて也○日本紀に日高見國とてええとて都と

つた也式に陸奥國桃生郡日高見神社又ゆ都とて意也古事記に  
天子の事日高見とあるを係者一○紀伊國日高郡と四方のゆ高と  
遠と故と私記よらふ

△ひが 神代紀に塗字と訓する氷土の事ありとやひがひぬま也土字にとあり  
土形の類是也チと袖ひがて源氏よありとひがてとて少万葉集に所濕は  
よありひたとて此をたし又ち也とて續字とてあり伊勢物語に浅とて  
袖と漬らめとあると万葉集に澤田川袖衝とて浅とてやと又拾遺集詞  
書に松の海よひらうあるとてやと海よのひらうある松とよありたり又ち  
也○万葉集よひづらと約めてひらとてり多し○新撰字鏡倭名抄に腕  
肘臂とよあり川かの事ありとて又とて也あり又ひらへてと通と肘に臂節  
也又祝詞に手腕タテヒとて又あり

ひがまきと 和名鏡に釧とてあり臂纏也涅槃經に在臂上者名之為釧と名  
ひがりと 和名鏡に泥とてあり土粉の事あり助語人一説よひがひぬまとて  
アハと通ふ



ひがらみあざ 古語拾遺に眩巫今俗竈輪及米占也と云ふなり女巫と云ふ  
△ひつ 万葉集に小竹櫃ヒツ云々のひつと云ふ訓をかき櫃ヒツに引おつた  
糸よ倭名鈔に俗に長櫃韓櫃折櫃小櫃等の名ありと云ふ式に明櫃あ  
り○古今集に袖ヒツと云ふと云ふ後撰集に袖ヒツと云ふと云ふ万葉集  
に漬字温字ヒツと云ふと云ふ也たも云ふ○ひつ川ヒツ山城紀伊郡木幡  
の里迄も小川也古人の詠せし山科川の宇治川入とのありし支木集に  
日ヒツの屋ヒツと云ふと云ふ伏見を明てゆふ櫃川の

ひつト 末乃時日乃西に旋るけんと云ふ宇治拾遺に午時過んづら  
るほと云ふと云ふ如し十二生宵乃内羊のとき我國よあまのちん  
十二辰乃本訓なる也尚齒會記につと云ふと云ふつと云ふの初め  
らるる羊蹄野乃名に云々松詞に用あたる今處々海島よ放ちかへとも  
食するものねに殺ヒツと云ふと云ふと云ふ羊の子に○野牛と  
称する物に綿羊と云ふと云ふ種也是も海島に繁殖せりと云ふ○拾遺集に午

未と云ふれよりひつと云ふと云ふ櫃と造ると云ふと倭名抄に  
つ○上野國多胡郡乃碑に郡成給羊と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ  
羊太夫乃碑と称し其事實と傳つたれと郡成給羊と云ふと云ふと云ふ  
養と通ふと云ふ○兼久記の武士に萬羊九郎秀頼あり其氏にひつと  
ひつと云ふと云ふ公武栄枯物語に萬年と云ふと云ふ○日本記略に殺懸羊白  
羊山羊と云ふと云ふ○浄海献羊乃後人多疾と云ふと云ふ世羊疾と云ふと云ふ百  
鍊抄に云ふ

ひつら 倭名抄に稽と云ふと云ふ自生稻と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ  
又志と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ  
ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ  
一年再熟乃稻ありて稻孫と民間乃食用と云ふと云ふ又此草と産帯乃中に入  
る事又産室乃片疊と是と用ふと云ふと云ふ故実ありと云ふと云ふ尾州よひつと  
哉前よひつと云ふと云ふ

日嗣と書り實位と云ふと云ふ後水尾院御制衣



大の〜ぬやよその國と我國の神のよんけてよるぬ日つと

今先帝御在位とて位と讓らるるはと讓位と稱し崩御乃後急位と繼せしはと踐祚と稱し式正乃礼乃行りせしはと即位と稱し  
○拾遺集よはとの後のおまのひつとよめるは日改の頁也

ひつと 棺とらふ倭名鈔よひつととよむ人木乃をたけり檀弓よ登木といふ  
左傳よ就木といふも棺槨といふ也又附眞曰棺とあるは人附りてをよめ歎之也  
ひつととよむとよむとよむ ○蓋棺事乃ては韓退之乃語く○死人乃棺中よ米  
錢と入るは旅行乃意よや儒華乃飯舎ともなり禱と入る上古の遺風ふ  
こゝろ ○負乃名よひつととあり又あつとよむかまひといふ其奥子ハカクといふよ  
よら

ひつと 俗よ縁坐乃るるといひたり引加るの轉訛なり

ひつと乃みこ 日本紀よ皇太子と訓せり日嗣よ立たまふ御子也又儲君ともよ  
めは皇太子たつとよむ

へんで 秀字とよむ日出乃るなり英とよむも同し ○牙杖とらふは日出乃るなり

松檜ふとらる

ひでり 神代紀よ早とよあり日照乃るなり ○ひでり乃神の倭名鈔よ早魁と訓  
せり本草よ文字指帰と引く早魁山鬼也所居之處天不雨とらひ又男魁女  
魁とらる

△ひと 人とらふ日與乃るなり一人の万物の靈をんて日と與る生々する意  
味よや古姓よ毗登あり續紀よる也 ○梅誕生云人在上則作人在傍則作  
下在下則作元若藁則均一喪二矣 ○仁とよむは仁は人也とるえより ○天  
子此御諱よ仁と通り名と成りしは後冷泉院よる也 ○日本紀よ他  
とよあり方言よ呼人曰他とるえより ○俗語よ自他と兼て人とらふ使  
人憂むの人よ同し ○又倫とよあり人倫の義也 ○万葉集よ馬と遠津人  
郭公とよむ人ともみ源氏よ琴歌とらひんともひ猫とらひんとも  
ひんともひんともひんともひんともひんともひんともひんともひんとも  
代とらふあり清盛と重盛と父子此間よて悪事と忠孝と分り義經と景  
時と主従の間よて軍功と讒佞と傳へ街談途説兒女子よ至るまで



碑より慎む一〇人きらさ心もあつた歌の香也萬葉集より  
くらふと不知らし書りすく此歌よ上よらと置く下よら  
くけらるるもくくらふた通つた九く此人乃心うまや王佐日記  
と諸乃院よて

君うひく世とかく宿乃梅乃く昔乃香と猶うほひりれ

定家卿云貫之歌心くくけ及難一詞片よく姿おもあろささか  
好く餘情妖艶の体はこのまんと此真乃風体よて意もてよはて  
もかたれくまかたれ内よくく雅あつ巧成あつれく風調とくま  
物也古今集よ入く歌よく心はけく吟味とくく

ひく一とらふ日興つ乃天天地乃間日より尊とあへん又人く通つ  
神代紀よも天地之中生二物状如葦牙とらる人乃始く口訣よ一者秘  
日於天地二也大載禮よ天一地二人三々而九八十一主日ノ數十故人十月而  
生とらる〇尾州知多郡よひくぬらんとらふとくひくくふとひく  
互よ誤下野もひくとららるくくくくく所ある〇古今集一本の序は

ひく心はくくくく万のまはあつた

ひく一人をらふく神代紀よ一身又孤獨もよまうひとたう乃略く  
みたらが剣くく又ひくくくく古事記よ二口とくくくく文述よ  
顔とまう注よ獨也と名又文よ獨自と連用する者ま一〇器よら  
和名鈔よ薰爐と訓や火採乃外木内銅又陶よ上よ銅乃籠と  
れは物之類聚雜要よ火取籠火取母乃圖及小火取乃圖あり香乃火く  
桐乃葉乃く繪ありて乃文字く

桐の葉とふく方くく成より必人を侍とれりれや

とらふ故也と或記よ又えくく

ひく日本紀よ間をよらり萬葉集よ人間とええく歌よまのい多  
く人間乃人乃見ぬ間〇一間乃葉もあり

ひく日本紀和名抄ホは圖圖とよらり人屋乃茶抄よ因獄司ひとやら  
くくく拾遺集よ人のけ侍ふ男乃あや侍く  
志のひつるあまそく唐衣ひとやえんとい思ひり



ひとぐく 備とよりの人形之偶人も同し土偶人木偶人もあり日本紀は葛靈  
 とくまひとぐくとよりの○後具も人形あり侍中群要は西一刺内藏寮供  
 御人形事とる由源氏のみくし川迄を心らす人ぐくとくも思ひやりと  
 又白歌日本紀の身代之茶也くつ式も金人形又金銀塗人像とくえ  
 祝詞式の東文忌寸部献横刀時死文の銀人といは是也金人銀  
 カといぬ文乃略之又鉄人形あり又茅がや草乃人形をくもつ類聚雜要  
 かくも胡人形なる○音くく人形と呼は玩具小像乃物称之主人形ハ泥塑  
 人也塑ハカクもつ

ひとだま 人魄之本草よも人溢死則魄入於地隨即掘之状如鉄炭く  
 もつる明月記は正治二年三月五日夜前北壺吳竹辺有入魂毛去とる白  
 毛時と地より三四丈と過す落くくもつ玉乃如く地下黄泉く入くも  
 或ハ落る所は黒色乃小虫多くくもつる  
 人たまのまかふる君々たひくもつあつる雨扱ハ久くおりの也  
 ひとくほく 一入再入之紅く朗詠集よるえく色くは詞ハ一段くく

ひとえ 俗語ハ西土よ環拱又連抱又一圍ふくつらひとだまの略く  
 ひとくき 神代紀よ人民又民一字とよりのく種乃養かろア古事記よ  
 人草くえく

ひとぐく 日本紀よ人別とよりの今音とくつ字類志よるくつ○  
 人言乃養けり又人の口くもつ夫木集  
 世の中ハ布痕と何く人人の口く行まきりきれ

ひととぢり 和名鈔よ一屯とよりの綿乃量之今義解よ綿二斤曰屯とるん  
 拾芥抄よ十二両為屯とる通鑑注よ綿六兩為屯とるん  
 純よ同く包束くとく佳ん  
 ひとぐく 伊勢神宮よ遷坐乃時よ人垣あり儀式帳よる○殉死乃人垣の  
 名ハ古事記よるん字乃まきり生死葬祭乃異あつる

ひとぐり 人心人情とよりの人心惟危とく歌よ人乃心とくたのま  
 とよりの文集大行路よ巫峡水能覆舟若比入心是安流とるん行路難よ  
 唯在人情反覆間とるの諺よ河中よ立くも人中よ立くもぬくも意是く



一拳此俗よオカハゆものこと一〇牛祭文  
嵯峨乃奥なる一〇下つてつたつた小祠乃称号なる一伊勢多度神社  
も一拳乃明神と称するあり〇拳字力の義あり詩よ一五拳五男と云  
ひとごころふ 借又傳又伴とよみつ獨白乃云なり自と云つとよめ万葉集  
よるえしり

ひととなり 神代紀よ性字質性の字なり訓せり日と共よ成乃常よ長と  
もよみつ神武紀よ成成人乃云詩經の覃とよみつ一箋よ始能坐也と云  
つる靈異記よ天骨とよみつ

ひとごころ 源氏よ由長眼歌よ一領とよみつ衣服よ就つてつ書つてつ一  
行とよみつ

ひとだのめ 先乃物より人よたのめと云ふ意と云つて幽齋在右よ人となつ  
はつらつ乃意なりと云えしり

ひとがら 倭名抄よ髑髏乃俗名と云つて人頭乃云也〇三河設樂郡鳳來  
寺修覆乃時一尺餘の髑髏と堀出つてつ慶安二年乃つ録倉乃深沢洪水

E

よて崩裂多かりつ時三尺と云つる髑髏と得つてつ齒乃大と一寸八分と云  
延寶三年乃事つ阿波勝浦郡大原浦よて髑髏二ツと堀出と頭乃ま  
りり三尺七寸額より臆まつて二尺四寸牙の長と一寸五分と云つて録十五年  
乃事つ奥州三春つけら丸岩屋に在つ髑髏ハ三尺齒ハ二寸骸骨三寸と云  
つる是皆防風氏乃類

ひとひかり 倭名抄よ大白神と訓つて新撰陰陽書よ大将軍者大白之精  
天之上客と云つ一日巡乃成つてつ大白星也と云つ曆林問答よ其居礎立柱  
上棟修造移徒嫁聚塗竈堀井築垣出軍葬埋起土百事犯用之大凶十二年  
還行四方と云つ

ひとよめごころ 太白神と同一と云ふぬと云つ神と云つてつ金葉集  
君と云つ一おめと云つ神と云つてつねと云つたつと云つ

ひとのらゝ 淮南子よ一葉落而天下知秋と云え注よ一葉ハ梧桐と云つ  
〇藏玉集よ一葉草と云つてつ

ひとのらゝ 舟と一葉と云つてつ韻會よ黄帝見浮葉以為舟と云えしり

接刺 卷之二十一







ひふのこやこ 万葉集よりなり越中の國府とらふ日本紀より東夷之中有日高見國

とらふよ 諸意同一リルハ何れの國よりとらふよ  
ひやとちむ 朝日の出よとらふひやとちむ邊鄙とらふ詞よりとらふ和名録より邊鄙

とあらまづと訓する者東方既白といふ如く  
遠近乃旅人今やたうわらんふ乃山乃ひやとちむ

△ひやん 俗よ乞食といふ貧人乃貧乏非人乃貧乏は貧窮の家といひやん  
といふも飢火乃貧乏といふ貧乃音なりといふ梵書よ如又行悪名曰非人といふ攝

逸勢乃姓と非人と改めく伊豆は流せり子續後記よえり○聖德太子悲田院  
とらふ其罪外乃者非人と名くもらふ

△ひぬ 和泉國より日根郡あり六帖より  
らつとむるひぬの郡のしひととむるをす君とむる

△ひゆり 武器より狼毫といふゆりゆりゆり○小鷹狩より馬上より鶉とか  
けく取物といふ

ひゆり 源氏より又指又捏といふ引練の音より一歌よりひゆり出んといふ詞主仇

日記よりえり禪家乃公案と指出すといふ意也といふ○こよるとひゆりハ  
撫へ○ちりちりといひゆりハ捫氣とも捫氣ともえり○人壽草木ふり二年乃

ひゆり 終日又盡日なり日目もふりてふ次略す今日目の目てふ語ハ  
ひゆりハ終日又盡日なり日目もふりてふ次略す今日目の目てふ語ハ

詞仁明天皇宝篋乃賀歌よ甚刺須終日須加良尔といえりひゆりハ日人採ハ取諸又  
はも及乃ハ歌をよめといふがごとくすかづハ物乃末よなうて尽んといふ詞ハ

ひやとちむ 別立ハ事もつとものといひゆりハまろとてえり噴とつとハ  
ひやとちむ 別立ハ事もつとものといひゆりハまろとてえり噴とつとハ

△ひ乃 日野と書り近江乃所名より日本紀より遺邇野といえり是ハ○編よ  
よぬとのハ上野國乃邑名○長谷部信連ハ流されハ伯耆の國日野○越

前よ日野川あり○荻生氏乃説よ諸國より日野の名らハ火野の音よて烽火  
より出する名ふといふ倭名録信濃國高井郡日野也



ひのえ 丙也火乃兄乃系續日本紀賊盜律乃し丙と景と作る西土乃書よ  
もえんころ

ひのゑ 日祈儀より儀式懐日祈内人為惡風不吹祈申告申進くえんころ風  
宮と風日祈宮くもく風日祈の神事あり

ひのとと 日本とより万葉集もえんころをくみ誤しや方記詞もえんころ  
とらう源氏よえん新古今集も成尋法師入唐侍りくも母乃讀侍りくは  
とあつと天の下もあつと照日の木はあつとあ

ひのくよ 肥前肥後流ら景行紀に到火國日没夜冥不知着津遙見火光非  
人火故名其國日火國とえゆ○大同聚類方火國藥肥葦北郡姬島直等家方而九  
恭御宇奏之元是女彦名神齋也とえも

ひのみこ 万葉集よ日之皇子と書り日神乃御高なるをこり奉るる年中行事  
歌合行幸乃題よ日乃り君もよあつ○日乃御孫日乃宮日乃御門意皆同

ひのたて 万葉集よ日経とえん日本紀よ日経とえんころ東西とらえん  
ひのおと 万葉集よ日経とえん日本紀よ日横とえんころ南北とらえん  
ひのかほ 畫御座と書りくごと音もく清涼殿より平敷御座と

ひのくま 別發行幸よ畫御座乃御劔と持せらるる也とのり徒然も出る  
○百練抄よ崇徳院乃時畫御座劔失くらるる又白骨のりもえん  
ひのみつさ 古語拾遺よ日御綱とえん注よ今斯利久迷繩日影之像也  
とえんころ今熱田乃神輿石清水乃神幸よ此物あり

ひのいろくよ 万葉集よ日入國よ所遣くも唐國と持る經籍後傳記よ  
日没處とえんころ

ひのりくや 神代紀よ日之少宮とえんころ

△ひい 檜葉乃系麻栢とら朝鮮ひごあつ唐ひとら今津輕前部より  
出れ檜も多くひんころ又らやばひひらり為尾ひむあつ志のぶひらり

○出雲國と伯伎國との界比波乃山古事記よも枕草紙よもひのひえ  
えんころ



ひぐく 檜皮ひぐく喜ぶといふ○東鑑に檜皮姫公と見え○海人薄

芥に武士の家より不造檜皮屋皆板屋作也といへり六位下檜皮葺屋

と禁せりれい日本紀略後一条の條に衣ひぐく色あり紙乃色と

といふ源氏も見えり花鳥に表に蘇芳は黒く裏に裏花田といふ○石ひ

くくらり濃州に檜皮うごてといふ所ありて産と

△ひぐく 日といふるは日々の謂なり○倭名鈔に疥とよみ又腫脹とも見え

ひぐくの新撰字鏡に輝とひみと訓せり○形とくちひぐくとよみり口瘰

の瘰○琵琶湖にひぐくとらふ魚あり鮎魚に似たりといふ水戸にひぐ

かけといひ枕渡して鳴まうりといふと○日比乃漆を備前とあり

ひぐく 響といふ引はの音をいへり郷と同一○ひぐくの方を播州高砂のは

らら乃海といふといふ忠岑家集にあつるものなるはあまひぐくの方を

いふまゝといふといふ一説に筑前鐘乃御崎乃近辺の名といふといふこの里

に伊賀伊賀郡といふ風土記にも向も響と同一

ひぐく 日本紀新撰字鏡倭名鈔に曾孫とよみり俗にひぐくもひまもといふ

ひぐく目督のしり重り隔つ意なりといふ○新撰字鏡に彦といふ

ひぐく 倭名鈔新撰字鏡靈異記に蛾と訓せり火敷のふもやと燈と消つとの也

山谷の詩に毛蛾卦燭甘死禍と見えり又蝨も訓せり○日本紀に瓢又者羽とよ

みり日敷のふもや盛表記に一つの鳥ひぐくめりといふ○万葉集に

蛾葉之衣といふありかのいぬと訓と異訓ありて思ひるは古事記に

内割鷹皮といふありるも蛾皮といふ一説文にも蛾蚕化言出也といふ書

記より以鶺鴒羽為衣といふ

ひぐく 倭名鈔新撰字鏡に疼とよみり挫悶ふくの疼痛といふ意味也

日本紀の歌にうるにそがらひぐくとよみり辛辣乃味といふ唇舌の

疼といふて響くといふ通へ成り一説文に疼動痛といふ

ひぐく 齊宮女御集源氏物語枕草紙あといふるにひぐくとよみり雛遊のふ也

雛の形といふひが形たといふ如しといふ人勝ともいふて呼り源氏よえ

朝も野分の朝も登り事と見えり昔ハ平生乃事たりといふ○ひ

なほいせといふ中務家集にいふていふやいりの齊宮女御集にいふ



うろ○上巳の雛提へく贖物の義也といふ源氏の君須磨に元遷り時三月巳の日陰陽師と召く被へさせしむくく人形と舟と載く流とす彼物語よりえう一説は兼神業の義ありといふ

△ひふ 盛衰記よりついでひふの上手と見えう一二の義をなすはの事といふ○服よりひふあり被風と書りひいんともう唐音の世物と黒縁と白くあつて成鶴斃とらふ也

ひふふ 倭名鈔より氷俗よりひふありと見えう源氏物語よりいひ地のとことちやとわたりけひぬうといふ俗より音りて氷うるといふ是也長和二年三月雷鳴氷降大如梅とも見えう○日振鳴の伊豫也純友が据る嶋也

△ひぼこ 神代紀より日矛と見え鏡といふ説は舊事記より名より据る鏡とも見えう

△ひま 和名抄より隙といふう日間の義より問もよまう○四声字苑より隙壁際孔也といふ又御とよまう○源氏よりひまある御中といふう

とらう 西土乃詞も同一に祓やのひまといふをなかりうう閨門乃隙のひまといふ

ひまぢり 日待の和室町殿日記より十月十五日今夜御日待例年也といふ上世はかー中世に來密家道士の習合してわら事あり大かー一條院の御後佛事の盛んありいまふに神事もなく姦仁よりうて朝延ありふたれ御事より俗より異ありかやといふ近世西山公の日待月待より禁せ

ひま乃ひかり 日本紀より隙駒といふ礼記より若駒之過隙然と見えう

△ひまが 源氏より氷水乃義和名鈔より膳夫経と引て氷漿今按以氷入漿也といふの成一思乃休の日記よりひ水すいんかといふうて○俗より乾水乃義

△ひむし 日本紀より秋より復虫乃火出乃衣より燈蛾といふ火採虫といふり○俗より豆の葉より甲虫といふり又和泉より上馬長也



乃日のゆゑに所は完をほりわらひ乃れどと云はるる水とせき  
く冬乃厚氷とぬめ置と六月一日ほり出と献と云ふ○朝野群載と差  
進氷事記せし神分料秋奠料關白殿下御料より官史生食所料まで  
又えく西は伐氷之家といふ意なり其條は氷長も云ふ○山城葛野  
郡は五處あり○東鑑は炎暑之節者召寄富士山之雪所為備珍物也といふ  
○ひむろといふ木の柏の類と云ふ○葦と氷室  
○氷室乃社南都といふ祠後氷室乃址あり後成郷

春日野乃古と氷室乃らと云ふ岩乃けりといひ猶も冷と  
ひんづの俗語下水乃をなるといひんづと云ふもひんづれ扱ふといふあり  
ひんづの式法はゆり大抵ふと云ふ同一鬢除はトより腋つめの事也髪かき  
二歳ふと云ふは五歳鬢と云ふ十六歳かきと云ふ方集は女子は鬢と云ふ  
男子は髪と云ふといふと云ふ方集は年のハセはるる髪のことと云ふ  
むかひハ八歳の比より云はれ始といふと云ふ

△ひめ 姫字媛字はあり日女のみ女子は美称也師古と説は姫といふ周姓其女  
貴千衆國之女所以婦人美飾皆称姫といふ○倭名抄は糰糕と云ふ非米の  
音ありといふつや物語よりトトトトトといふひめといふも云ふといふ水飯也  
ともいふ松多紙と云ふひめのぬきと云ふと書り今俗ひめのつと云ふ三寶空類  
抄は糰粥とのつと云ふ是也○同書は鶴と訓せり伊豫風土記は鶴といふり  
○侍中群要は昏下供御院称御比米と云ふ

ひめ 源氏物語より白秘と云ふ也といふ  
ひめ 日本紀は命婦といふり延喜式は宮人といふり姫乃称也乃称は六位といふ  
ひめがき 神代紀は蝶といふり姫壻の事也城上女壻也と注せり神壻といふ如く  
ひめがき 和名抄は糰糕ひめがき注は非米非粥之系也といふ少集韻云糰糕  
米也類篇云煮米為糰廣韻云煮米多水也云ひめの下は又云糰差類  
考曰糰糕ハ即平生所食の飯の類也古くは飯と稱するものハ今の強飯是  
也又曆家よりひめがきといふあり是れハ供へていへり也然も  
異説と云ふ者あり用益ありといふ







伊言集 卷之二十一

うしうしとええとらふことぐい貫之のすよしゆ

ひもがゞゞ 万葉集の紐鏡とえし紐の類也のしれ山つてけーの鏡の裏乃紐  
ハ常ニ着て解ひ莫解との云也ふとのしきうとらう○氷百鏡の義もけり  
藻塩まの鈴麻の瀧とひもがゞゞとふハ十瀬の波とらう

影清く岩間の水れんもがゞゞとけてもまよひふりふか

△ひや 日本紀及宋史の火筒とええとらう古弓めて射とらう後世らふものなり  
火器也とらう○石火筒大筒火筒炮火筒大筒鉄砲ふとのふけり全  
浙兵制のし手銃とひや鳥銃とだんごひや砲とらうかと譯せり○俗に化城と  
らう

ひやと 令冷の義也○刀りて人と斬とらふも義同し轟字とよむ説文の耳  
而切之為膽とええとらう

ひやうじ 火危の急語也源順夜行翁の狂歌に夜々警火舊府中呼曰火危彼誰  
何とええとらう火用心の義とらう

ひやぶー 拍子とらう和名抄の百師の音とらひひやぶと也神樂の拍子未拍子けり

手拍子 坊拍子 扇拍子 ちりちり切韻に拍子打也とええ延喜式に擊百子とえ  
えあゆみ拍子のひやと拍子の事也と体源抄とええとらう又半拍子とらう  
又間拍子○鞠とけり足がゞゞ三拍子けり今俗に三拍子とらうとらう是成七  
○關東の馬上とて響けつとらうこの音とらひひやぶとせざるまゝひやぶ  
とらふ本とありとらう

ひやうとん 江次第の平文高札けり是は白木に丸い胡粉とて盛くとの也  
とらう延喜式に時繪案平文案と並べに置上とらうぬ地面の平とらうとらう  
いたるや記録に平文持衣とらええとらう禪問の技に平文謂以白鴈彫唐花也  
とらう

△ひゆ 冷とらう氷雪の義倭名抄に冷酢とひゆとゆきるとらう○轟字の  
同し今(ぶ)とらふ詞也とらう○倭名抄に莫とらう性冷の義と東風とひ  
やう津輕とひやうあざ加賀とらひひやうとらふ赤見とあらひゆとらう深色計  
とらう馬齒莧とらひひゆとらう相摸とらぬひやうとらふ今とらうとらう  
ひゆ也加賀とらひひやうとらふ自見の唐とらひひゆ也五色莧とらひひゆ也又まひ

倭訓林 卷之二十一



ゆるらふ常のむゆら

△ひよ 鹿の音よらるま木集

萩一つらふり序よらるまかみはふかひしつわも

ひよ 雞の雛よらるまはもどりし成一松子紙よ雞のひふのひも

かしましくつてそえ神宮ひよりの祭も意同

ひよ 霽とらふ日依の義日方とらふ如○諺よ天一太郎とらふ天一天上の朝

日事次郎よ八事の日め土用三郎の土用の三日め寒四郎の寒よ入四日め也日雨

ふり出せ天氣はちとら

ひよ 十二支はらふ日讀の義也月神と月讀尊とまらるる物と数ふ事

とまらるる漢も同○元々十二支の名は十二肖はらふとらる春風堂隨筆

よ今人以十二生肖配十二辰為人命所屬莫知所起とらる

ひよ 身底記よしよらぬまららる瓢の轉せし詞成へし尾張よ直よ瓢

とひよとらら或は内の詠言也とら

ひよ 平家物語よ狂紋とらる大双帝よ素襖よらる今家紋の加へ紋

とひよとららるるかひふらるる或は表紋の字よ物よつけ表とらるる

物見よあるあまの車はとらら紋はとせせらるる始とらら○家紋の起る

らつの時ある成るる蜻蛉日記よ菊紋ととらるる事又えよれと今の定紋

の義よ非す中世武門盛ふらら幕の紋よ家と分ては是より始るる家々の

定紋とらるる成一又秘文あり又通文とらるる事死よるる唐花系とらるる香葉

ふとららふしと紋た紋とらら誰と看してと若くやぬとららとらら

西土の花別よあはるる其幕の紋の推古紀よ旗よ繪くともとらら温觸らる

つと又宗五記とらる書よ公方様御服よ織物よ色御紋不定自と綾又ハ

綾はむぎを地成色々よ深く御紋紫ふよけらるる是は東山義政公時代の

事と御紋不定ある成るる其比に衣服の家紋とらるる何の紋とらら

也とら

△ひら 平とよらり関く義也○紋とよらるる茶とよらるる茶同とらるる物語と

一ひらとよらるる紙とよらるる又張とよらるる皮一張の類也○

名と成とよらるる花朝成らるる体源抄よ足少衛とよらるる平重衡らるる○平門の扉



の上は横木をわきわたるといふ○ひらの近江國へ躬恒集まらるるの山代かして  
かくてのまゝかといひのママまゝにのりけいといふまゝなり

ひらら 日本紀に平瓮とよみりるの瓮の不成魚一式に或は水瓮と訓せり又手湯瓮  
とあり新撰字鏡に味とよみり考得と護しよる倭名抄に盆とよみり瓮と同  
一唐韻に凡器也といふなり今俗漆器に音とりて盆といふもの其形の似く  
る成りしと槃の属也○古來神官費土師の居所と平瓮といふ式に多氣郡宗神  
社にえゆとく大波のつとあり今居城南に移り里人世記の故事より  
て天平瓮と造りし今具形状とあり朝夕の御饌調進の土器と造り  
まゝのもの○洪水にて豊受宮正殿の下に天平瓮と漂せし事ハ鳥羽院の時よ  
く百練抄にええり○住吉の神事預る女子よ公孫何り平瓮よりおる  
事といふ○ひららの翁の出羽の平鹿郡よりおる事といふ新六帖  
よりあり○平賀氏ハ東鑑にえゆ元元護良親王に從て十津川に匿る赤松律師  
則祐村上義光平賀三郎也と三條に  
ひらら 日本紀に葉盤と云三代格に枚手と云倭名抄に葉手といふ式に葉形葉

盤比良豆似葉形ともええり今代大嘗祭の糸手に栢葉茂竹の針とて孟の形に四  
く平く造りし秋に葉盤に栢葉に盛物也といふ日中行事よりありとええ  
類聚雜要及今俗平盤と称する物の此遺制あり出羽にて平皿たりり  
といふ下總奥州よりいふ○建武年中行事よりいふてこの御飯  
ええり  
ひらら 開とよみりらるる及る登よりいふ詞成り一發と同一  
ひらの 平野の社の四姓の氏神といふ仁徳天皇とて祭る又舒明天皇也  
袋草紙にええり

二十社次第第一今本神日本武尊源家氏神第二久度神仲哀天皇平家氏  
神第三古閑神仁徳天皇高階氏神第四比賣神天照太神大江氏神第五縣神天  
穗日命四姓氏神中原氏清原氏菅原氏秋篠氏といふ祝詞に今本久度  
古閑のを奉り関式より開と作りしと文徳實録江次第も皆  
関とて延喜格に延暦年中立伴社といふ桓武の御父光仁天皇いす余







ひくま 大嘗祭より高橋氏の文と枚次とありひくまのひくま

ひくま 古事記より目貝の名也日本紀より比羅夫より人の名多し是

ひくま ○古事記より後田毘古神渙より比良夫貝より其手成作言

ひくま と云今昔物語より後大の溝貝と取んとせしに

ひくま 戦國策れども

ひくま 牛治拾遺より蛇出てひくま

ひくま 俗よりひくま

ひくま 蛭藥也魚膽より加藥

ひくま 神代紀より日と

ひくま 伊勢物語より

ひくま 又

ひくま 今俗

限以臭香失可為其限者為家之傳説自以為故實然則以臭失之時可從

清淨事欽 ○門首より蒜と

り日本紀より

しる又

薬より

大蒜と

字鏡より

あ

あ

あ

あ

あ

あ

あ



信言言身... 御膳等... 廿七

ハ敷字也播字も意同... 〇鼻とひるハ噴嚏也... 〇午枕ハひるのよくら也

ひるむ 蛭身の者也... 〇倭名抄ハ瘰癧とひるむヤまひと云... 東鑑ハ將軍家御蚊觸之間可有蛭啗之由...

ひるが... 翻と云ふ... 日本紀ハ領巾又肩巾と云ふ振手の約する名也... 祝詞ハ比礼桂伴男と云ふハ女の御膳等...

成らる男ハ緒の借字也... 〇万葉集ハ踏領巾と云て... 〇内宮御神衣と云比礼あり... 〇花よらハ...

要則 千本 卷之二十九

廿八



あるふくは皆其物に採ふて振物の名也又古事記に振波比礼切浪比礼  
ふくも同一と衣服の事なるべし○ひきふる嶺は万葉集にも肥前國  
松浦郡あり又新後拾遺にもゆる石見國美濃郡より高角山とよみ  
合せり日本紀に大葉子ひきふるを致すも万葉集にも佐用姫  
の事あり古外國より終りしとの領中振る其魂は招き故實の  
事なり鎮魂祭の意に近し

△ひろ 神代紀に尋とよみ開くをひろ太戴禮に舒肱知尋と見え佳  
生論注に里舎間人不簡徒横長短兩手臂為尋と見え今もあまの  
て物とよみひろとよみ楊子方言に自閑以西九物長謂之尋もひろ  
○名は源巨識とひろ○とよみ○万葉集に舟の事にはせんひろとよ  
るも尋の義もや

ひろし 廣とらふ尋とる意也弘も同一まむめ又かきくけとて用らけり○  
新撰字鏡に衍とひろまるとよみひろまらむ也○廣又廣と同一  
ひろふ 古事記に撥とよみ新撰字鏡に拈とよみ常と拾とよみ又撥とよみ

廣くれの意也算家よひろひさんくらふ係法也○万葉集よひろひらひ  
とゆふこととえゆひろふの古言なり○今俗史とひろまるとらふ禮記に拾級聚足  
とも

ひろめ 倭名抄よ昆布とよみ今音と呼び一名えびとめとよみ蝦夷島より出  
たりて水戸の海に昆布は義公より始す○俗に祝賀の物とよみ廣めの  
名よよみひろのーと音同一音よよみひろのの事とらふ後の事也とらふ

ひろがこ 神代紀に廣牙とよみ古事記のひろき此梓也ともらふ  
ひろがと 日本紀に飄とよみひろがとと意通う新撰字鏡に賜とひろがとよ  
り

△ひと 枕草紙よ見え山家集よよみ鴨字に篇海に昆鳥也とみゆひひとよみ  
弱と意なり二合の意とる也○かきひとまかきひとともらふ小也とよみひと水也頭上  
真紅也ぬしと至小也たてひと所々青黄也かきひと大也とらふ○漆色よひ  
と茶色の醬色もらふ

ひろが 源氏にも厄弱の意とらふ或は婿人とひろがひとよみ





△ひぬ

△ひぬ

△ひぬ

日本紀の置部は諸國の置部なる所おほく延喜式に云置部内  
外置部二町と云ひ出雲風土記に置部は置部伴部等所遣來宿傳而為政之所  
故云置部郷と云也

△ひぬ

△ひぬ

△ひぬ

△ひぬ

△ひぬ

△ひぬ

△ひぬ

△ひぬ

△ひぬ

鑑より火威と書り又緋甲の字北齊書より云うあけの草より威せる  
音今鏡より云う源仲綱の宇治川の軍より云う歌  
いせ武者の皆ひをいせの鑑より云うの綱代よかてける哉  
氷魚の寄より伊勢の武者のひをいせの鑑より云うの綱代よかてける哉  
氷魚の紅葉と鋪より故實と云うよりいせの盛衰記の初のことより云う  
と云うより文より伊勢國の住人古市の白子黨より云う古市の渡會郡より云う白  
子の菴藝即より云う古市の伊藤五伊藤六平治物語より云う平家物語の目野の

十郎と三重郡の日野村より伊勢平氏より云う平家物語より云う伊勢國三日平  
氏より云う東鑑より云う

倭訓栞前編二十五終

伊勢川千本 卷之二十一



信言

新羅聖德太子

卷之二十一

新羅聖德太子

Vertical columns of handwritten text in a rectangular frame.



